

第4回山の気象シンポジウム

1960年6月11日13時 第一第二会議室

大井正一(気象庁山岳部): 上層の気温の変動度(20分)
1952年の富士山頂の毎時の気温を用いて、その変動度を調べた。平均の変動は $0.53^{\circ}\text{C}/\text{時}$ 、最大値は $2.6^{\circ}\text{C}/\text{時}$ である。12時間で 10°C に達することもある。変動量は下降の場合の方が上昇の場合よりも大きい。同方向の変化の継続時間も上昇の場合の方が長く1時間変化については上昇は最大11時間、下降は最大18時間に達する。

吉川友章(気象庁山岳部): 山岳地の気流の数値解析(序報)(15分)

山岳地の気象変化は気流の上昇・迂回が密接に関係する。そこで山岳地の気象を客観的にとりあつかう手段として、ラージスケールの一般流が地形に応じて上昇あるいは迂回する度合を近似式をもちいてあらわし、谷川連峰について実測と計算した結果を比較する。

また、小型パイロットバルーンを2点から写真撮影した山岳地の気流の観測結果についてもふれる。

下村登喜夫(理大気象部): 雪面の温度効果について(2)(15分)

前回にひきつづいて、昨年12月末より1月始めに、雪面の気温に対する影響について調べた。前観測の結果によると観測方法に種々の問題点があったが今回は温度計にはサミスターを使用し6点を同時に連続記録してみた。未だ確かな結果は得られないがその時の状況から判断出来ることについて報告する。

山本三郎(富士山測候所): 富士山の気流と登頂ルート(15分)

富士山上を吹く風が各登山ルートにどのような影響を与えているかを2,3の例をあげて説明する。

石田泰治 **山本三郎**(富士山測候所): 富士山の雪崩について(25分)

大休戦後富士山に起きた雪崩について、気象的立場から論じ、とくに気圧配置と富士山の気象資料からこれ等を解明し、底雪崩、新雪雪崩の差異を述べ、これ等の原因、予知についても言及する。

大井正一(アルムクラブ): 冬の上高地の気象(25分)
アルムクラブでは1956—7年冬期、北穂、奥穂の合宿を行ったが、その当時の気象変化を天気図と対照して説明する。

大和田正利(気象協会): 天気図から見た夏山の遭難(30分)

ここ2年間あまり山で遭難した時の気象の変化を天気図より統計した。そして如何なる気圧配置の時遭難事故が多かったか、そのデータをもとにして、今後登山者に対しての天気図の見方を説明したい。

例 1. 日本海を南下する寒冷前線通過の際

2. 夏型気圧配置の不安定の時 3. その他

高橋 博(地質調査所): 山岳用精密高度計について(15分)

登山者が使うには少し高価なものだが、山岳用精密高度計を実際に使用してみた結果について述べる。それと同時に普通の高度計の使用結果にも定性的にふれる。

中村憲一(専大山岳部): 一ノ倉遭難の気象(25分)

専大山岳部では昨年5月17日より26名で一ノ倉合宿を行ったが18日2ルンゼで3名が凍死した。当時の状況と気象について説明する。

宮内駿一(予報課): 谷川岳の遭難(専大)(20分)

(1) 谷川岳の風はNE、気流は天気良いようだ。

(2) 天気が良ければ登ると云う態度に賛成だ。

しかし、低気圧圏内の良さや高気圧の吹き出しの悪さとある。何のため、良いか、とうことを考えて登ること。低気圧の構造を頭に書いて登ることが大切と思う。

広瀬 潔(日本山岳会・日本雪氷学会): 登山家と気象知識(20分)

最近岳界もこの点に注目し研究を進めているが、速成的に天気図の作成解説や予報の方法を学んでいる。しかし基礎的知識が不十分で、すぐ方法論にはいつているため理解に悩み応用がきかない悩みがある。それで一応気象学総論を読んで基礎的知識を貯えるよう努力されたい。登山雑誌の読者も同様気象学総論を読んでから、各論の記事に接するよう努力されたい。

久米庸孝(予報課): 夕刊の天気図による天気予報(30分)

上野や新宿で汽車を待つ間、夕刊をよむ。その夕刊の天気図を見て、明日および明後日の気圧配置を予想するにはどうしたらよいか。一番簡単に誰にもできる判断法をのべる。